

第百六十四號 (第十五卷)

(昭和九年) 十二月號

草場君の場合

(巻頭言)

大阪のアマチュア草場修君の大型星圖のことが世の中に紹介されて、一般の社會人士は異常な驚きを表はしてゐる。此の事件は、近頃の行きつまつた社會世相に或る一つの明るさと朗らかさを投げ與へるものであるが、純學術界のためにも暗示は大きい。

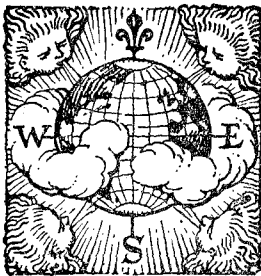
草場君は昨 1933 年の夏の頃から 時々花山を訪れて来る アマチュアであつて、特殊な型の星圖を畫く興味と熱心とを有つ珍しい中年者である。大分縣の産で、若い頃は視力の確かな青年として友人間に知られてゐたとか。小倉の輜重隊にゐた頃から耳を病み、數年前、全く聽えなくなつた氣の毒な人である。誰一人身寄りもなく、只、毎日雜務に雇はれて生命をつないでゐた由であるが、少年の頃からフト興味を覺えた星への親しみが、不思議にも此の孤獨の身を慰め、人々の寢靜まる夜な夜な、ひとり屋外の神秘的な星空の美觀を追つてゐたといふ。それから圖書館へ行く楽しみを覺え、遂には星に關するあらゆる書物をあさつて専心に勉強した結果、一通りの天文常識を養ひ、ついで一轉して、晴夜的美觀を紙上に再現して、大宇宙創造者の心理を體驗しやうといふ勇猛心をおこし、手製のコンパスや定規に頼りつゝ、寸暇をさいて畫き終へた大星圖が、花山へ運ばれたのは昨 1933 年の夏であつたが、此の圖は普通の地圖と同じ座標型式で畫いたために、天球儀の如く、天を裏かへしにした珍物であつた。此の缺點を注意された同君は直ちに最初から畫き直す決心をし、尙ほ星の名や文字の配置などに改良を加へつゝ、今秋又々立派なものを花山に持つて來た、それは我が東亞天文協會の總會の日であつた。

此の年月の間に、草場君は日々の糧のために勞役をなしつつ、暇には天文の基礎研究を怠らず、涙ぐましい努力を、楽しみつゝ、續けて來た。昨秋の全國的な獅子座流星群のシーズンには、同君は京都帝大病院に入院中の窓から多數の觀測報告を齎した。又、最近の近畿地方大風害には我が身を忘れて復興事業に参加した——そのひまに、過去數年來購入愛讀しつつあつた書物

を大部分盗まれて了つた!! といふ運命の悪戯にも會つてゐる。しかしながら、大阪の、近代的な悪魔社會に住みながら、草場君は、夜毎の星を友とすることによつて、極めて明朗善眞な精神を持ちつづけ、義理厚く、禮儀正しく、稀な高潔の心を保ち、常に微笑を以つて人と相對し、誠に美しい印象を周圍に與へてゐる。

今回、同君の事が世に知れわたるや、遠近から夥しい同情者や援助者が現はれ、之れが又今の世の、必ずしも暗からざる一世相の表現ともなつたやうである。今後、同君は京都の地に暫く身を休めて専ら星圖完成の大事業にいそしむわけであるが、學内學外の多くの人士は可なりの期待をかけて、其の圖の成りゆきを見てゐる。しかし、吾人は、尙ほ其れ以上に、同君の人格が更に美化され、あらゆる意味に於いて學界の名花とならんことを望むものである。(山本)

花山の風害の經驗から



去る九月21日の暴風は、花山も非常に猛烈な害を受け、官舎は大破し、反射鏡や太陽鏡の格納屋家は倒れて了つたが、一つ誠に不思議に見えたことは、子午線館から遙か南に離れたミール(目標)が全く無事なことであつた。此のミールは反射鏡の格納庫よりもいかにも弱く、手輕るに出來てゐるし、場所も南スローブにあつて、こんどの風は最も強く之に當つたに違ひない。しかるに此の簡単なものが少しも破損しなかつたのは、一見不思議であるが、之れ全く、此の格納屋が、設定の當初から風に對して弱々しいとの心配から、四つ隅にそれぞれ針金のステールを張つて置いたためである。ちょうど野の中の電柱が、四方から大小の針金で張られてゐるために強風にも倒れず、健在してゐるのと同理である。此の經驗から見ると、前記の反射鏡や太陽鏡の格納庫なども、針金のステールを設けて置けば、こんどのやうな大風にも立派に抵抗し、案外頑健に存在し得た筈だと思はれる。一般天文家の參考になる一事である。(山本)